文献からみた祖納の歴史 －上村遺跡を中心として－

石 垣 金 星

(1) はじめに

これは、上村の時代についての伝承と文献資料等に関する報告である。西表島の歴史ドラマのメイン舞台となった「上村（ウイムラ）」とは西表島の古村の一つ祖納集落の西側の小高い半島全体を称する。上村に対して現在の集落は「下村」とも称される。明治30年代に実施された土地整理事業によって作成された地籍図では上村を西祖納、下村を東祖納としている。上村は「アダティ」・「ウフダティ」・「ウカリ」の三つの小村よりなり、アダティウガン（クシムリ御嶽）、大竹（オオダケ）ウガン（大竹根所）、ヌスクウガン（慶田城（キシダケ）御嶽）がある。下村は「スンバレ」・「マヤマ」・「ウティンチ」の小村よりなり前泊ウガン（現在ナリヤウガンが同居する）、ニシドウガン、西泊大御嶽（ニシドマリクブウガン）、離御嶽（パナリウガン）がある。下村のニシドンの浜に面してユヌンフチ（与那国口）が開けている場所に西表村番所と慶田城村番所が置かれ、かつての西部地域の政治行政の主舞台であった。番所跡には現在祖納公民館が建っている。

大正年代になり通称「ピサダ」と称される下村の水田地帯はマラリヤ蚊の発生源との事から埋め立てられた事によって、これまでに水に不自由をしていた上村の人々は次第に埋め立て地へと移動しはじめ昭和10年頃には上村は完全に空屋敷となり、現在の祖納の集落が形成された。その後空屋敷となった上村の一部は畑地として耕され続け現在に至っているが、去る大平洋戦争勃発と同時に昭和16年日本軍（陸軍省）によって上村全域に及んで強制的に土地接収され要塞が築かれた。西表の歴史の発祥の地である上村はその主役として活躍した大竹祖納堂儀佐の居城であった家敷をはじめとして実に二万坪に及ぶ（上村全面積の半分以上）土地は返還されず今だに「軍用地」のままにある。

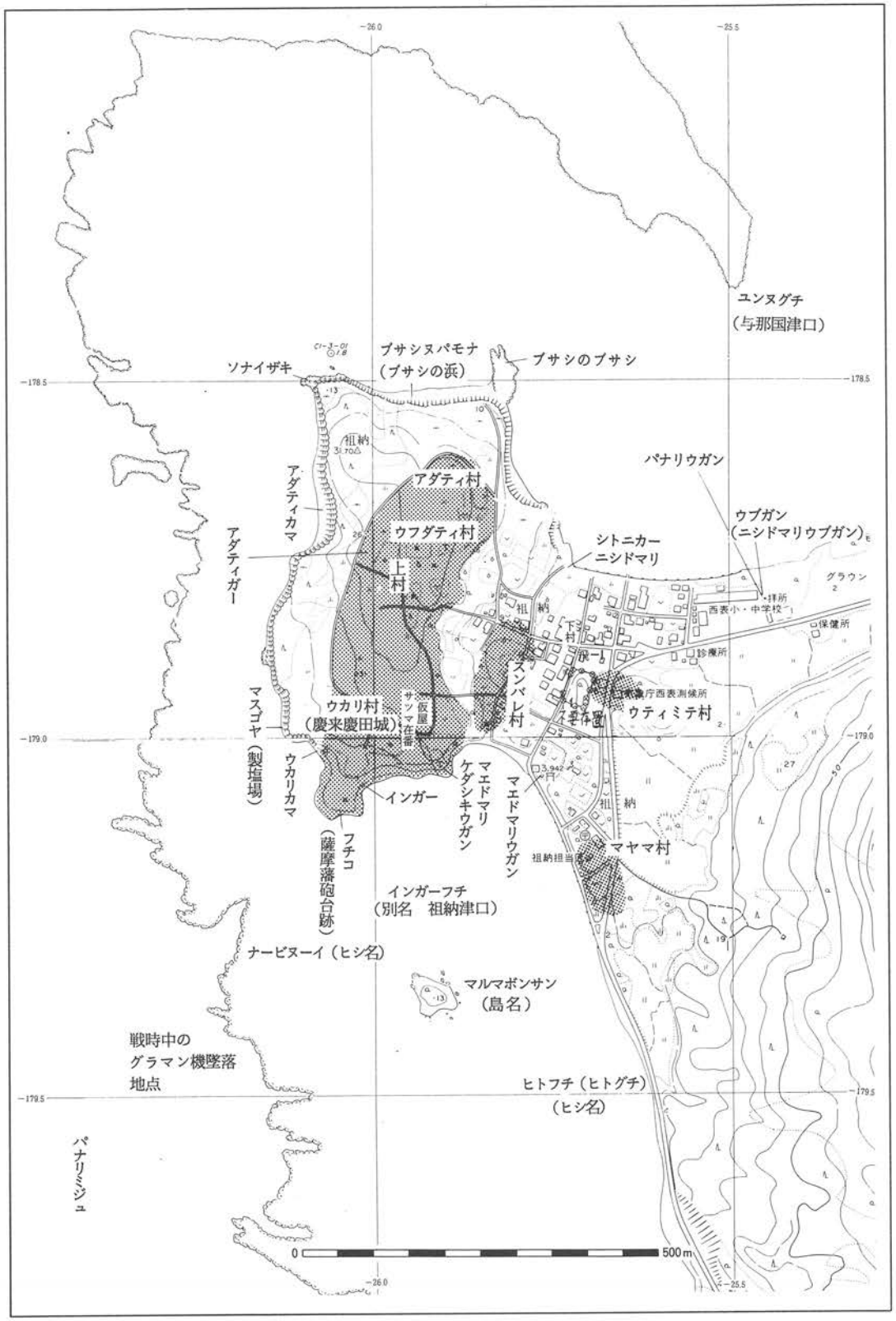
(2) 大竹祖納堂儀佐（オオタケソノドウギサ）についての伝承

大竹は家敷のある場所の地名で、祖納堂は集落の名称で儀佐が名前である。1700年代初期に書かれた八重嶋由来記（南島第一輯）では次の様に紹介されているのが唯一の記録である。当時すでに伝説上の人物であるが、大竹祖納堂なる人物像を知ることが出来る。

をはたげ　根所神名なし

との神名をたいかねませと神　　慶田城村

右由来は上代當島西表村 祖納堂と云ふ人あり其高六尺餘高にして勇力人に勝たる人にてをはけたと云所に家を作りける或時晴天森に登四方の景気を見渡すに西の方に島蔭幽に相見得けれは兵船用意にて勇力の者敷十人相語ひ順風に帆を揚け與那國島に渡り相戦ひ討勝島酋長の者二三人生捕り降参させ後に悪鬼納かなし御手に入ける時其由奉奏たる由申傳也依之與那國船當島住還の時は西表島に潮掛りいたし彼をはたけ家の火神を拝み申事今迄有来る也


ユンヌグチ
（与那国津口）
ブサシヌパモナ
（ブサシの浜）
ブサシのブサシ
ソナイザキ
パナリウガン
ウブガン
（ニシドマリウブガン）
シトニカー
ニシドマリ
アダティ村
ウフダティ村
上村
アダティカマ
アダティガー
マスゴヤ（製塩場）
ウカリ村
（慶来慶田城）
仮屋
サンバレ村
ウティミテ村
ウカリカマ
インガー
マエドマリ
ケダシキウガン
マエドマリウガン
フチコ
（薩摩藩砲台跡）
マヤマ村
祖納担当
インガーフチ
（別名　祖納津口）
ナービヌーイ（ヒシ名）
マルマボンサン
（島名）
戦時中の
グラマン機墜落
地点
ヒトフチ（ヒトグチ）
（ヒシ名）
パナリミジュ
西表小・中学校
保健所
診療所
祖納
0
500m

大竹祖納堂野子孫にあたる大竹八重雄氏（那覇在）、宅にも記録もなく祖納堂という人物を物語る唯一の資料であるがこれらと関連する次の様な伝承が島で伝えられている。

「昔のことである。祖納のウフダキに祖納堂儀佐という人がいた。夜中になると毎晩のようにこっそりとどこかへ出かけては、翌朝の夜が明ける前にはそうっと帰って来て何知らぬふりをして寝るのであった。不思議に思ってブナリ（姉妹）は儀佐の目をぬすんで寝床をみると海水でぬれていた。これはきっと舟に乗ってどこかへ出かけているに違いない、との思いから、ある夜の事、自分のアマチ（髪の毛）を三本舟の艫にこっそりとくくっておいた。（草麻（ヅー）をくくったと伝承される古老もいる）。ある朝のこといつもの様に夜中に出かけた儀佐は、アマチによって舟足が遅くなり夜が明けて戻ったのでとうとうブナリに知られてしまった。それから儀佐はブナリへ、与那国へ毎夜のように行って来たことを話したという。祖納堂儀佐が使ったヤフ（擢）は六尺余りもあって昭和の初め頃まで大竹家に残されていたが火災にあい焼失してしまったと大竹八重雄氏は話しておられた。

又、祖納堂儀佐が与那国を討ち敗って帰ると殺された与那国の人々の亡霊はチコホウ（コノハズク）となって報復すべく祖納村めざして飛び発った。ところが祖納村と間違えて崎山のヌバン崎の南にある「ピサト村」を襲い全滅させてしまったという伝承がある。大竹祖納堂儀佐とは一人で舟をこいで一夜のうちに与那国へ行って戻ったと伝わる人並はずれた体力の持ち主であった。儀佐の墓はこれまで定かではない。大竹家の屋敷の西側にテーブルサンゴを円形状に積み上げた。「チンマサ」があり「ブナリの墓」と伝えられている。東側には宮古島にある「ミヤーカ」とよく似た型式の墓地があり一枚岩で囲った石棺がみえているが、おそらく祖納堂儀佐が葬られているものと想像される。そしてミヤーカとおぼしき一角には、「チンマサ」式に石が積み上げられ儀佐が遠見台として与那国を見た場所ともいわれ、半島で最も高い位置に当たる。ところがこれらの石積みは日本軍が上村に要塞を築いた時に崩され大砲を運ぶ道路の敷石として使われ現在の様になったものという。与那国の人々が八重山へ住還の時に祈ったとされる大竹の「火又神」はブナリの墓の前に置かれている。与那国船の出入するニシドンの津口には「ユヌンフチ」と今でも呼ばれる。与那国の30代のある女性から「石垣島の高校」へ行っていた時、船で与那国へ帰る時は西表島の前を通過する時は必ず「手を合わせた」と興味深い話をうかがったが、大竹の火又神のいい伝えが与那国でも最近まで残っていた例として興味深いことである。又祖納堂儀佐が港に出入する外来の船のために掘らせたと伝わる「シトニカー」（井戸）がユヌンフチのあるニシドンの海辺にある。

(3) 大竹御嶽（オオタケウガン）と鍛冶遺跡

大竹御嶽は祖納堂儀佐を祖神とした御嶽であるが、鍛冶遺跡は6年前大浜永亘（八重山商工高教諭）によって偶然にも発見された。ところが御嶽の鍛冶についての伝承は一切消えてしまっている大竹御嶽の神司であった稲福峯さん（故人）へも伺ったが、「願い口、神口」にも鍛冶に関する伝承もなく峯さんご自身も鍛冶についてご存知なかった。又、子孫の大竹八重雄さん

も御嶽の鍛冶についてはご存知なく、御嶽の隣の屋敷が鍛冶の跡であったと先代より聞いていた。そして明治の初頃までは鍛冶が行われていたらしい。又鍛冶の技術担当は、上亀家であったらしい。フイゴも昭和の初め頃まで残っていたとの事であったが現在は不明である。大竹祖納堂は上村において農具を作り人々へ農を奨励したと伝わることから農の神とされ大竹御嶽は時代が移り変り人の世の権力構造が変わっても「神事」の世界におけるナンバーワンの地位は変わる事なく現代まで続いて来た。これらは集落の成り立ちを理解する上で興味深いことであろう。

(4) 竹富島の鍛冶神について

大竹御嶽の鍛冶伝承が全く消えているのに対し竹富島では非常に良く伝承されていて、上勢頭享氏（故人）より次の様な興味深い竹富島の鍛冶神についてうかがった事がある。

①波座真御嶽の祖神の根原金殿（ネーレカンドウヌ）は屋久島より渡って来た。②小さい頃から鉄の粉を麦のように食べて成長した。③青年の頃には鉄で作った擢を使って遠い海を渡ってきた。④得の高い人で農業をひろめた。⑤与那国を領地にしたいと考え与那国へ行くが失敗し返り討ちに合い死んだ。⑥一夜のうちに与那国からこぎ戻ったという様に伝わる人物で、祖納の鍛冶神であった大竹祖納堂と共通する点があり興味深い。伝承では根原金殿は屋久島より北の方向を示しているが大竹祖納堂は伝承でも不明である。六尺余の擢と鉄の擢を使い、一夜にして与那国へ行き戻ったとされる二人は人並はずれた文字どおりの鉄人の風格は共通する。共に与那国をめざしたが根原金殿は失敗し討死し、大竹祖納堂は成功し討勝った。鉄を産しない西表と竹富の二人の鍛冶神がめざした与那国とは、果してどんな魅力があったのであろうか。鍛冶神にとっての最大の魅力とは鉄の原料である事は想像できる事だが鉄を産しない与那国であるが、14世紀中頃にはすでに鍛冶屋の存在が認められており、与那国は鉄の原料を果たしてどこから入手したのか関心のあることである。大竹御嶽鍛冶遺跡の鉄滓を分析された大澤正己氏（新日鉄八幡）は一昨年祖納公民館において分析結果について実に興味深い報告をされた。報告によると①大竹御嶽遺跡で使われた鉄の原料である鉄鋼石は日本では産しないものである。②中国大陸の揚子江沿岸一体より産する鉄鋼石とよく似ている（これは新日鉄揚子江沿岸産の鉄鋼石のデーターしかなく、近くの台湾とかの資料のデーターはないとのこと）③つまり日本に産しない鉄鋼石を原料として鍛冶をしていた大竹鍛冶は中国大陸方面から原料が入って来た可能性がある。と指摘していることは誠に興味深いことである。大竹祖納堂の時代の祖納は南の島々と公益があったことを示している。西表・与那国・台湾・中国大陸・南アジアの島々は内眼で見えて島づたいに人々が移動可能なことからも充分うなずけることである。また、与那国で発掘されたドナンバル遺跡の鍛冶の羽口の特徴は大竹鍛冶遺跡の羽口とよく似た特徴をもっていることは両島の関係を示す注目される点である。

(5) 済州島民の見た祖納

1477年嵐にあい漂流した済州島民らは与那国で救助され、しばらく滞在した後西表島へ送ら

れ五ケ月も祖納に滞在し島の暮しぶりをつぶさに見た。『李朝実録』（成宗実録）1479年。

昨年（1990年）夏、漂流記に記された先祖たちの足跡を取材する目的で済州島より高光敬先生（済州大学校博物館・民賊学）一行が実に500年ぶりに来島された。その時高先生より「閏伊」（与那国）と「所乃」（祖納）について閏伊は「ユニ」・所乃は「ソネ」と顕すことをご教示をいただく事ができた。現在では与那国のように字を当てているが、今も島では「ドゥナン」であり、西表では「ユヌン」石垣方面では「ユノーン」などと称しており500年とほとんど変わっていないことがわかる。又「所乃」も今では祖納の字を当て「ソナイ」とも読んでいるが、今でも島では「スネ」が当り前使われている名前である。「ソネ」と「スネ」の「ソとス」は西表の方言では無声音となるので実際にはほとんど同じに聞こえる。これからも500年前も今も祖納（スネ）の名称は変わっていないことがほわかるが語源については不明である。

又、彼らは鍛冶屋の存在をみており、農具を作りカマを使って稲刈りをしているのも見ている。又、稲は初め刈りとり放置しておくと再び初め以上に盛んに実る品種であることからすると、いわゆる在来品種で1970年まで網取にて栽培され続けられた「アハガラシ」に良く似ている。「アハガラシ」とはノギが長くモミが黒く中の玄米は赤い特徴のあることから「赤いカラス」の名前が付けられているが、このアハガラシと同じ種の稲が台湾の山地族の間で現在でも栽培されていることを国分直一先生（梅光女学院大学教授）は指摘されていると、西表の稲作のすぐれた研究を報告している安渓遊地先生（山口大学助教授）により西表の稲作が南アジアの島々へと広がっており、台湾経由で西表へ入って来たことを明らかにしている。

稲に関する習俗に「七八月の収穫前には人々は皆謹慎して大きな声を立てない……。収穫時には「小さな管」吹く…」ことを見ているが、今でも伝わる「シクアーンモーヒ」の「ヤマチ」とほとんど同じで「小さな管」とは「ヤマチ」（謹慎）を解く合図として稲刈り後に吹かれる竹のクダで「ジッチャーン」と称される。ジッチャーンを作るには「ダドー」（ダンチク）が使われるのは霊力などの不思議な力があると考えられていたと思われる。このダドーの生える場所は稲と同じ湿原地帯であり西表では水田地帯以外では生えていない事からすると、稲と同時に入って来た可能性も考えられる。

山には猪（イノシシ）がいて槍を使い猟をするのを見ているが、この伝統の猟は今でも伝えられている。イノシシには「カマイ」と西表では称され、槍は「フク」と称している。イノシシを獲れると隣近所の村人が集まりイノシシ料理を食べるのが今に伝わる習慣であるが「猟人が自分一人で食べる」としたのは何か特別の事情があったようにも考えられる。

漂流記には大竹祖納堂とおぼしき人物の記述はないがそれからわずか20数年後にはもう一人の英雄、慶来慶田城が同じ上村に登場することからすると大竹祖納堂儀佐は当時すでに過去の人物であったであろうと思われる。

祖納での特徴の一つは「婦人が鼻に穴をあけ小黒木を貫いている」のを見ていることであるがそれらに関する伝承はない。

「麻や木綿もなく、蚕も養ない、唯芋を織って布と為す。」……藍青で染めてある、西表では全島各地に自生する野生のヤモ（ノカラムシ）から採った糸も「ブー」と称して布にした事を田盛インツさん（91才）よりうかがった事がある。「藍青で染めて」と藍染めのことをさしているが、八重山ではインド藍（ナンバンコマツナギ）が栽培され続け藍染の伝統は小浜島、竹富島で祭と共に伝えられいる。インド藍は島では「シマ藍」、「トー藍」とも称されており、以前に波照間島の「ブリブチ（下田原城跡）」の庭でインド藍が自生しているのを見た事があるが、かつてこのブリブチに居を構えていた人々が栽培しているものと思われる歴史の証言者に外ならない。波照間の方々へうかがった折「染め草」がブリブチにある「トウアイ」ともお教えていただいた事があるが藍染の技法は伝承されていない。インド藍は今でもインドネシアなど南アジアの島々ではごく普通に栽培され藍染めに使われている。沖縄では八重山諸島にだけ栽培されてきたのも特徴の一つである。インド藍の性質は栽培が非常に容易であることが最大の特徴である。ある程度の野生化でも自生するたくましさがある。一見するとギンネムと良く似た木である。七、八月の真夏の太陽で青々と成長し冬は成長しない性質があり水のないヌング島でも簡単に栽培可能な多年性のカン木で種子は自然落下し発芽成育し成長は早く、半年では藍染用に使用できるというすぐれた性質を持ちかつ年三〜四回も収穫できるのである。人が生活する上での基本である「衣食住」のうち「食と衣」は人の移動と共に常に一緒であり、済州島民の見た「藍青」はインド藍の可能性が高いことは与那国に残される古いミンサーの藍色からもわかる。

(6) 慶来慶田城の時代

済州島民の来島からわずか20数年後に起きたオヤケアカハチ事件（1500年）を機に慶来慶田城用諸は一躍歴史の舞台へデビューし大活躍をして首里王府より「西表首里大屋子」に任ぜられ西部地域全域を勢力下に置いて近世集落の基礎を築いた西表を代表する英雄でもある。18世紀末に書かれた慶来慶田城由来記によると、初代用緒は外離（フガヤナリ）（祖納の真向いの島）の野底頂（ヌスクティチ）に現われ石垣島の平久保加那安払を討ちその後に祖納上村のフチコへ移り居城を構える。伝承によるとフチコ時代の用緒は岬に旗を立て揚げて南蛮貿易をした人物であるとされる。フチコには用緒が旗を立てたと云われる穴が今も残り、カマドと井戸の跡といわれる遺跡が城跡に残っている。その後さらに「東石屋」に居を移し一族を核に上村を拠点とした慶来慶田城の時代を築くのであるが、1640年西表祖納に南蛮船が漂着し「幼女を一人連れ去る」という大事件が発生、その後1648年頃まで「サツマ在番」が上村に置かれた石火矢（大砲）を設置し南蛮船の撃退に備えている。ヨーロッパ列強が琉球を足がかりとして日本をめざした時代に西表島祖納は南の海防の最前線基地でもあった。1600年代中頃に、西表村の中で慶来慶田城の一門を中心として同じ祖納に「慶田城村」が誕生し同じ祖納の同じ敷地に西表・慶田城の二つの番所が隣り合って存在する事になる。そして御嶽も西泊大御嶽と離御嶽は西表村に入り他は慶田城村に入るという奇妙な神事形態が続く。ヤマニンズ（氏子）は祖納の人々は全て前泊御嶽、西泊大御

嶽、離御嶽の三つの御嶽のいずれかに属している。慶田城村の前泊御嶽のヤマニンズは全て綿芳氏慶来慶田城の一門で構成され、西表村に属する。西泊大御嶽と隣り合ってある離御嶽はそれ以外という構成となっている。その後200年足らずで1700年後半に慶田城村は改易される運命となり元の西表村慶田城村へと組み込まれ新たに上原村が創建された事によって事実上、慶来慶田城の時代は終わりを告げる事になる。清明祭の候には錦芳氏の一門はヌンバレ頂の側にある初代用緒の墓前に集まり初代の徳を偲ぶ「シーミー祭」をしている。その後の西部地域では崎山村、西表村、上原村の三つの行政区で明治を迎えることになる。激しく変わり行く時代の中でマラリヤはさらに西表の人々の多くの生命を奪い村落の発展を拒み長く続いた上原村は明治20年代に廃村となり明治40年代には鹿川は廃村、崎山は昭和20年代網取は1971年（昭和46年）復帰を目前にしての廃村であった。そして残ったのはわずかに舟浮、祖納、星立のかつての「西表村」である。「西表」の名称はさらに引きしまり、「祖納と星立」が行政上「西表」として現在歴史に名前をとどめている。

石垣金星（西表をほりおこす会長）

参考・引用文献

1．嘉手納宗徳『第一巻　李朝実録　琉球史料(3)』松涛書店　1982年。

2．比嘉盛章「八重山嶋由来記」・「慶来慶田城由来記」『南島』　第１輯（八重山特輯）
東京・八重山文化研究・再版　三栄社 1976年。